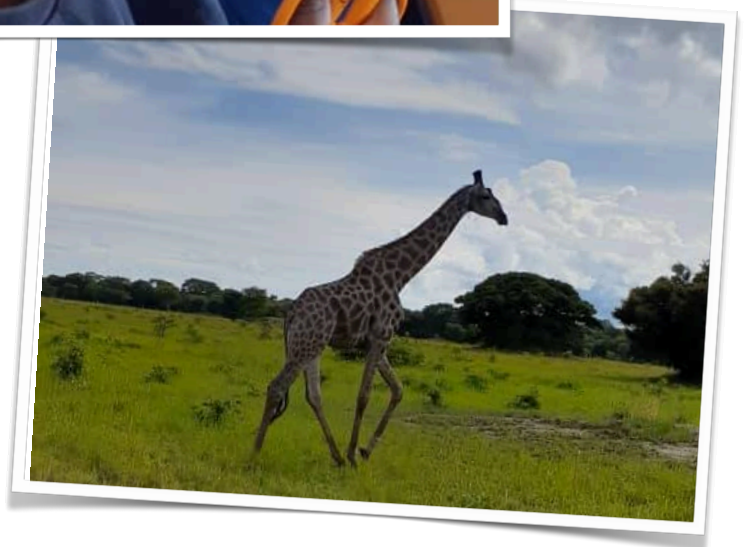


飛び出そう世界へ！

佐賀県出身JICA海外協力隊からの活動報告



世界には、貧困・飢餓、教育、疾病、環境問題など、さまざまな課題が存在していますが、開発途上国からの要請に基づき派遣された「**JICA**海外協力隊」が、これらの課題を克服するため、世界中で活躍しています。

現在、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、佐賀県出身の**JICA**海外協力隊員が、派遣国が抱える課題を自分の目で発見し、現地の人々と協力しながらその解決方法を探すために、日々活動しています。佐賀県は、そのような「**JICA**海外協力隊」の活動を応援しています。

今回は、現地で活動している隊員からの活動報告及び**JICA**の在外事務所で彼らをサポートしている企画調査員のインタビューをお届けします。



目次

目次	・・・	1
JICA海外協力隊活動報告		
活動報告者紹介	・・・	3
派遣国紹介（ザンビア共和国）	・・・	4
活動報告	・・・	6
JICA海外協力隊をサポートするシゴト	・・・	9
JICA海外協力隊の概要	・・・	15

JICA海外協力隊活動報告

活動報告者紹介

【氏名】 山本 恵理

【隊員区分】 2019年度2次隊

【派遣国】 ザンビア共和国

【職種名】 障害児・者支援

【協力隊に参加したきっかけ】



学生の頃に青年海外協力隊のことを知り、いつか参加してみたいと思うようになり、特別支援学校での実務経験を経て、自分にもできることがあるかもしれないと思い、参加しました。

JICA海外協力隊は、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響により、2020年の3月から4月にかけて、一斉一時帰国となりました。その後の国内待機期間を経て、2020年末ごろから、安全と健康に留意しつつ、徐々に派遣を再開しています。

山本隊員については、2019年12月にザンビア共和国へ赴任されましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年3月に日本へ一時帰国を余儀無くされました。

日本での待機期間を経て、2021年4月に再赴任が可能となり、現在は、同国で活動されています

派遣国紹介

Republic of Zambia

ザンビア共和国

《基本情報》

ザンビア共和国はアフリカ大陸の南部に位置し、周りを8つの国に囲まれた内陸国です。面積は約75万km²（日本の約2倍）、人口は約1768万人です。自然豊かな大地には、世界3大瀑布の一つである「ヴィクトリアの滝」や世界第2位の広さを誇る「カフエ国立公園」などがあります。

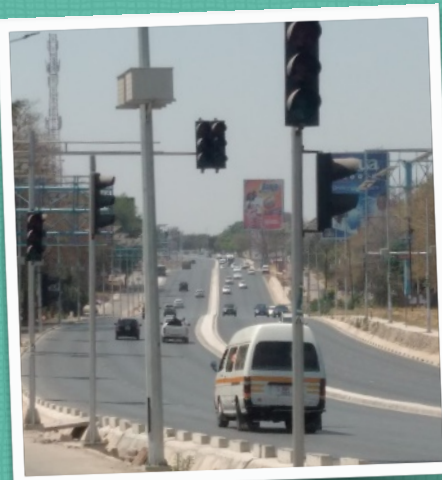
アフリカの気候といえば、灼熱の太陽に照らされてとても暑いイメージがありますが、4～7月は乾季で涼しく、朝晩は厚手の上着

がいる程寒くなることもあります。

ザンビアには73もの部族があり、公用語は英語ですが、地方によってベンバ語、ニャンジャ語、トンガ語など7種類もの現地語が日常的に使われています。

《任地の様子（住んでいる場所）》

元々はザンビア第3の都市であるンドラというところに派遣されていましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で首都であるルサカに任地が変更になりました。ルサカは、人口約290万人で人口



主要道路には、日本のメーカーをはじめとするたくさんの車が走っています。

増加が著しい都市です。ショッピングモールがいくつも立ち並び、必要な物は何でも手に入ります。街の開発も盛んで、大きな道路や建物が続々と建設されています。自動車の量も多く、日本のメーカーの車もたくさん目にします。道端には、青空商店が並び、トマトやトウモロコシなどの新鮮な野菜や果物、小麦粉を練って油で揚げたお菓子などが売られています。ザンビア人はとても気さくで、街を歩いているとよく挨拶をしてくれます。

《派遣国の料理》

ザンビアでは、「シマ」と呼ばれる、トウモロコシをすりつぶして粉にしたものをお湯で練ったものが主食として食べられています。片手で一口大に握って、付け合わせの野菜やお肉と一緒に食べます。ザンビア人曰く、「握れば握るほどおいしくなる」そうです。



シマ（左）とメインのおかず（右）。
とてもボリュームがあります。手で一口大に握って食べます。

活動報告

《配属先の紹介》

配属先は小学校に隣接された特別支援学校で、5歳から18歳くらいまでの約150名の児童生徒が在籍しています。知的障害や自閉症、脳性まひなどの障害のある児童生徒が通っており、障害の程度によってクラスが分けられています。



配属先の学校

《活動内容》

私は同僚の先生と二人でレセプションクラスを担当しています。このクラスには約15名の児童・生徒が在籍していますが、家庭の事情や体調などにより日によっては出席者が少ない日もあれば、全員出席の日もあります。国語、算数、美術・音楽の教科の他に、日常生活に必要なスキルを学ぶ教科もあり、教科書は使わずに、子どもたちの実態に応じて生活する上で必要な知識や技術を授業で取り上げています。

《苦勞したこと》

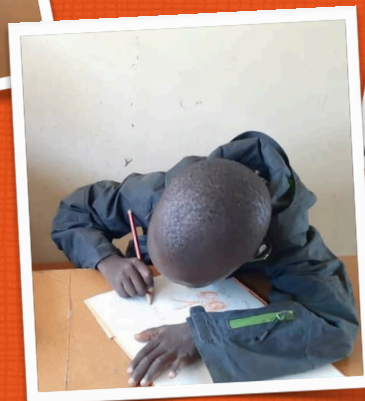
任地が変更になったことや新型コロナウイルス感染症の再流行で活動開始から約1か月で学校が休校になったことで短期間での活動となりました。また、「コミュニケーション」という大きな壁もありました。ザンビアでは、英語が公用語ですが、現地語として日常的にニャンジャ語も使われています。自分の英語力が乏しいことに加え、特別

支援学校の子どもたちはニャンジャ語しか話せない子も少なくありません。その時々、行動や表情を見て、子どもたちの気持ちを何とか汲み取ることはできても、こちらからの指示や指導がなかなか伝わらず苦勞しました。喧嘩が起こっても原因がわからないため指導することができず、間に入って喧嘩を止めることしかできませんでした。以前の特別支援学校での勤務経験の中で発語のない子とも関わった経験があったので、言葉を介さなくても子どもたちとのコミュニケーションはとれるだろうと思っていましたが、思っている以上に言葉に頼っていたことに気付かされました。

また、日本の特別支援学校では授業をチームティーチングで行うことが多く、複数の教師で指導や支援に当たっていましたが、ザンビアでは教師の数も少なく、チームティーチングがあまり浸透していません。そのため私の授業では、言葉は通じない、個々に対応していると別の子どもたちが喧嘩を始める...授業が途中で中断したり、子どもたちがぞくぞくと教室を出て行ってしまい、気付けば数人しか教室に



製作活動を通してハサミや糊の使い方を学んでいるところです。集中して取り組んでくれました。



アルファベットのなぞり書きをしています。



生活スキルを学ぶ授業で、教室の掃除をしています。ザンビアで一般的な柄のないほうきを使って丁寧に床を掃いています。

残っていなかったりすることも多々ありました。思うような授業ができずに、毎日のように落ち込んでいました。

でも、子どもたちは学ぶことが嫌いなわけではなく、活動や課題の内容が分かれば意欲的に取り組んでくれました。伝わるようにイラストや見本を使ったり、クイズを出したり、個別に対応が必要な時には他の子どもたちに別の課題を用意したりと試行錯誤しました。うまくいかないことも多かったです。ハサミや糊を使っただけの製作活動では、珍しさもあったのか順番が来るまで待つことができ、自分の番になると集中して取り組んでいました。子どもたちに何かを学ばせたり、できるようにしなければと考えると子どもも私も息苦しくなってしまうので、いろいろな経験をする機会を作って、そこから何かを感じてくれるものがあればと思っています。

《残り任期の活動の目標》

ザンビアでの子どもたちや先生との縁を大切にして、少しでもボランティアを受け入れてよかったと思ってもらえるように、残り僅かな任期ですが心をこめて活動したいと思います。

JICA海外協力隊をサポートするシゴト

JICAの在外事務所等で、JICA海外協力隊の活動全般をサポートする「企画調査員（ボランティア事業）」という仕事があります。

現在、佐賀県出身者であり、隊員経験もある企画調査員として働く2名の方に、隊員時代や現在の仕事についてお話を伺いました。

< 佐賀県出身企画調査員×佐賀県国際課

お二人のお名前、現在の勤務地を教えてください。



和田 仁智

和田 仁智（旧姓：古賀）です。
ガーナ共和国です 🇬🇭



寺崎 一生

寺崎 一生です。
マラウイです 🇲🇼

お二人には、隊員時代の話やJICA海外協力隊員をサポートされている現在のお仕事についてお話を伺います。

まずは、JICA海外協力隊員時代の活動について教えてください。



和田 仁智

ケニアの首都ナイロビ近郊にあるゲタスル男子更生学校にて、体育・図工の授業と放課後のグラウンドでのゲーム（サッカーの試合）の時間を担当しました。子どもたちの社会復帰（更生）と健全な育成を目指して、主に、サッカーを通して、子どもたちの「自分で考える力」を育てることを意識して活動しました。



和田 仁智

「世の中には知らないことばかり」

ケニアで出会った更生学校の子どもたちは、どんな悪い子なのかと思いきや、元気でやんちゃな普通の男の子たちでした。盗みなどの軽犯罪をしてしまう、させてしまう社会にも問題があるのだと知りました。世の中にはまだまだ自分が知らないこと、実際に自分の目で見てみないとわからないことがいっぱいあるのだと知ることができました。そして、もっと知りたいと思いました。

「人と人をつなぐことのおもしろさ」

更生学校の子どもたちを取り巻く環境を良くしようと、他の更生学校や地域の学校のサッカーチームとよくサッカーの試合をしました。他の青年海外協力隊員にも協力してもらって、日本人を含むケニアに住む外国人のチームを招いてサッカー大会をしたこともありました。サッカーを一緒に楽しむことで、更生学校間の情報共有がしやすくなったり、地域や外部の人たちから関心を持ってもらえるようになったりしました。サッカーに限らず、おもしろければきっかけはなんでもよくて、それが新しいチャンスにつながるのだと思います。



2021年10月



寺崎 一生

私は、**2014年1月**から**2016年1月**までアフリカのマラウイと言う国で、産業・貿易省の**OVOP**事務局に所属し、品質管理のボランティアをしていました。**OVOP**とは**One Village One Product**の略で、大分県で始まった一村一品運動をモデルとして農村地域の所得向上を図るもので、私たちは、農村グループが作る特産品の品質向上のサポートをしていました。



隊員としての活動修了後、佐賀県に戻ってからどのような活動をされていましたか。



和田 仁智

帰国後は、ひとりでも多くの方に国際協力に関心を持ってもらえるよう、**JICA**国際協力出前講座の講師として活動しました。**2017年**からは**JICA**の国際協力推進員として、佐賀県で出前講座の活動を続けつつ、国際交流・国際協力に関するイベントを企画・開催するなどして国際理解教育の推進に努めました。



2021年10月



寺崎 一生

活動終了後は、職場の自己啓発休暇を利用して参加していたため、基山町役場の産業振興課に復職し、同じく地域振興の業務に携わることになりました。

マラウイでは、品質管理だけでなく、販路拡大のサポートもしていたので、ボランティアの経験は、帰国後の自治体における特産品開発や販路拡大、六次産業化の促進を進める上でとても役立ったと思っています。特に帰国当時、基山町ではオーストラリア原産の大型鳥のエミューを活用した地域おこしに取り組み始めたところで、加工処理場建設、商品開発から販路拡大まで新たな取り組みだったにもかかわらず、マラウイの経験が背中を押してくれたように感じています。



企画調査員の仕事について聞かせてください。



和田 仁智

企画調査員（ボランティア事業）として、**2021年3月**からガーナ共和国にある**JICA**事務所で**JICA**海外協力隊の活動全般をサポートする仕事をしています。ガーナの課題を解決するための協力隊派遣計画をつくったり、隊員の配属先と協議をしたり、隊員の活動支援にかかる安全管理や経理・事務処理など幅広い業務を行っています。



和田 仁智

企画調査員としてようやく5か月経ったところなので、隊員経験が現在の仕事に本当に活かされているのか定かではありませんが、私が隊員だった時にサポートをしてくれていた企画調査員の方々の仕事を知ることができて嬉しいです。今さらですが、感謝の気持ちが湧いてきます。あの時の企画調査員の方々ののおかげで私は充実した、楽しい隊員生活を送ることができたのだなと思いました。まだまだこれから勉強しなければならないことばかりですが、私も現在の隊員さんたちが充実した活動、現地での生活を楽しく送れるよう、全力でサポートしたいと思っています。



寺崎 一生

現在、私は**JICA** ボランティア調整員（企画調査員）として、再びマラウイに戻ってきました。隊員当時は戻って働くことなど想像もしていませんでしたが、それでも、隊員時代の経験や知り合いが、今の仕事にも役に立っています。

振り返ると、コロナ感染拡大による避難帰国から、日本での待機、再渡航後も在宅勤務と、想像していた業務とは大きくかけ離れたものでしたが、一方で、この時期だからこそ、海外で仕事できたのはかけがえない貴重な時間だったと思っています。



寺崎 一生

2021年6月、445日ぶりにマラウイに3名の隊員が戻って来ました。派遣は首都から4時間の移動圏内に限られ、活動自体も制限されています。かつてのマラウイ協力隊を知る人からすれば、もの足りなさを感じるかもしれません。それでも、厳しい環境の中で、課題解決に向き合う隊員の姿は昔と変わらず、ふとした瞬間に彼らの成長が垣間見られると嬉しい気持ちになります。コロナ禍の厳しい状況はしばらく続くと思いますが、これからも日本人の世界への飛び立ちの一助になればと思っています。



お二人とも、ありがとうございました！
協力隊員へのサポートなど、現地での活動を応援しています！



和田 仁智



寺崎 一生

ありがとうございました。

JICA海外協力隊の概要

JICA海外協力隊の目的

JICA海外協力隊とは、開発途上国からの要請に基づき、青年海外協力隊等として派遣され、現地の人々と共に途上国の課題解決に取り組むことを目的としています。任期は原則2年間で、これまで世界98カ国に5万人以上の隊員を幅広い分野に派遣してきました。帰国後は、日本や世界で協力隊経験を生かした活躍が期待されています。

佐賀県からは、これまで71の国・地域に379名※の隊員が派遣されました。なお、2020年には、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、全隊員が日本に一時帰国しました。しかし、同年11月に、安全と健康に留意しつつ、派遣を再開しています。2021年10月現在、1名の佐賀県出身の隊員が派遣中です。

※青年海外協力隊・海外協力隊、日系社会青年海外協力隊・日系社会協力隊、シニア海外協力隊・日系社会シニア海外協力隊、各短期派遣を含みます。

3つの主な目的

開発途上国の
経済・社会の発展、
復興への寄与

異文化社会に
おける相互理解
の深化と共生

ボランティア
経験の社会還元

活動分野と職種

JICA 海外協力隊には、9つの分野、190以上の職種があります。

計画・行政

国・地域づくりに関わるシゴト

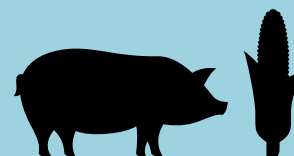
- コミュニティ開発
- コンピュータ技術
- 行政サービス
- 防災・災害対策 など



農林水産

食べ物や自然に関わるシゴト

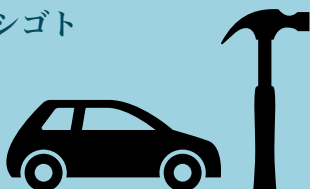
- 野菜栽培
- 家畜飼育
- 食用作物・稲作栽培
- 土壌肥料 など



鉱工業

ものづくりに関わるシゴト

- 自動車整備
- 建設機械
- 食品加工
- 金属加工 など



人的資源

教育やスポーツなど人を育てるシゴト

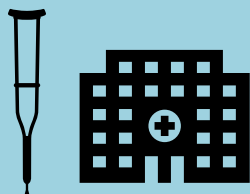
- 小学校教育
- 各種スポーツ職種
- 青少年活動
- 環境教育 など



保健・医療

いのちに寄り添うシゴト

- 看護師
- 感染症・エイズ対策
- 理学療法士 など



社会福祉

福祉に関わるシゴト

- ソーシャルワーカー
- 障害児・者支援
- 高齢者介護 など



商業・観光

マーケティングや観光に関わるシゴト

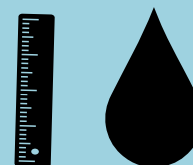
- マーケティング
- 経営管理
- 観光 など



公共・公益事業

生活サービスに関わるシゴト

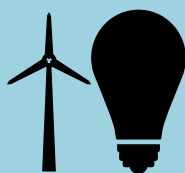
- 土木
- 建築
- 上/下水道
- 廃棄物処理 など



エネルギー

エネルギーに関わるシゴト

- 電力
- 再生可能・省エネルギー など



さらに詳しくはJICA 海外協力隊HPへ！

<https://www.jica.go.jp/volunteer>